

京都大学	博士 (情報学)	氏名	阪本真由美
論文題目	被災者の生活再建に対する国際協力に関する研究		
(論文内容の要旨)			

開発途上国で災害が発生すると、被災地が復興するために巨額の国際支援が行われる。しかしながら、国際支援の多くは被害を受けた、道路、上下水道、通信網などの物的資本の再建に費やされており、家族を失う、健康を失うなどの被害を受けた被災者の生活再建のための支援は、住宅の再建、所得向上のための小規模融資などに限られている。これらの支援策では被災者の生活再建は困難であることが明らかにされているものの、その一方で、生活再建に有効な国際支援の要件に関する研究はほとんどみられない。

本研究においては、1995年1月17日に神戸市を中心とする阪神地区を襲った阪神淡路大震災からの復興過程において、生活再建の要素の一つとして新たに提示された「人と人とのつながりに着目した概念である「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」に着目し、生活再建とソーシャル・キャピタルの係わりについて、インドネシアの事例研究を通し様々な側面から検討した。

事例としたインドネシアのインド洋津波災害の被災地であるアチェには、地域の人々が「ムナサ」と呼ぶ祈りの家とその信者から構成されてきた宗教を基盤としたネットワークがあった。ムナサは、宗教信仰を深める場としてだけでなく、子どもへの教育、地域活動、争い解決の場というように地域の人々を結びつける役割を担っていた。また、地域によっては、「ムナサ」あるいは、複数のムナサが集まり構成される「ムキム」と呼ばれる地域共同体が、自治区分と同様の機能を担っているものもあった。被災者の生活再建においては、ムナサを通して行われた種々の活動の有無が影響を及ぼしており、津波災害後に国際支援を活用して新たに造られた再定住地においては、祈りの場として「モスク」が建てられているもの、ムナサや、ムナサを基盤とした人と人との関係は構築されていなかった。そのため、宗教を基盤とした活動のみならず、地域活動なども行われておらず、それが被災者の生活再建に影響を及ぼしていた。

ソーシャル・キャピタルの分析は、アチェのムナサのように、一見すると宗教的な関係が、実際のところ、人々の生活においては様々な機能を担っていることを明らかにする点において意義が高い。従って、被災者に対する生活再建に対する支援を行う際には、そのようなソーシャル・キャピタルの多様性に配慮するとともに、人と人との関係を分断してしまうのではなく、それをより豊かにする支援が重要である。

ソーシャル・キャピタルに配慮した被災者の国際支援の要件としては以下の通りである。

第一に、支援を行う側が、支援受け手側の社会に根差し、地域についてより良く把握するとともに、支援受け手側の信頼を得て事業に取り組む、あるいは、それが時間的に難しい場合は、地域の人々の手に事業を委ねそれを側面的に支援することである。

第二に、被災者のみに焦点を当て支援を提供するのではなく、支援を通し、被災者と被災者、被災者と地域の人、支援を実施する人と支援受け手のというように多様な社会的ネットワークを構築し、ネットワーク内部の相互協力を促進することである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、「被災者の生活再建に対する国際協力に関する研究」を題目として、学位申請者が推進してきた複数の研究成果を集約・総括したものであり、理論面、実証面双方において、災害復興や生活再建に対する国際協力に関する従来の研究に大きな前進をもたらしたものと評価しうる。

理論面での大きな貢献としては、鍵概念として「ソーシャルキャピタル」(社会関係資本)を用い、災害後の被災者の生活再建に関わる複数の問題群を統一的、総合的に読み解くことに成功したことを指摘できる。まず、被災者の生活再建とそれに対する支援を、災害前に被災地域に醸成されていたソーシャルキャピタルと、支援活動が依拠するソーシャルキャピタルのマッチングの問題としてとらえかえした点を高く評価できる。この際、研究フィールドとなったインドネシアにおける「ムナサ」、「ムキム」といった場所、組織、あるいは、「ゴトンロヨン」、「アリスン」といったローカルな社会制度が、全体として、生活再建や災害復興をどのような社会的実践として意味づけているのかについてエスノグラフィックに明示している点が本研究の特徴の一つをなしている。

また、災害により障害を負った被災者に対する支援をソーシャルキャピタルへのアクセスに関わる問題として、さらに、災害に関する地域社会の記憶に関わる一連の活動(被災地における博物館建設など)を、生活再建や復興支援活動を組織化するために動員される意味的な資源の一種として、ソーシャルキャピタルの一翼に加えた点も斬新なアイデアだと考えられる。

実証面では、学位申請者の長年にわたるインドネシアにおけるフィールドワークは、地味ながら着実な仕事であると評価しうる。特に、インド洋大津波、および、ジャワ島中部地震という2つの災害に襲われた合計4つの被災地(アチェ2点、ジョグジャカルタ2点)における複数回にわたるインタビュー調査、参与観察の結果として生まれたエスノグラフィックは貴重な労作である。

他方で、いくつかの課題も見いだされ、学位申請者の今後の研究活動において克服されることを期待したい。すなわち、インドネシアにおけるフィールド調査から得られたローカルな文化的実践としての生活再建に関わるエスノグラフィックな記述部分と、それをソーシャルキャピタルを中心とする分析言語によって解釈する記述部分との区別が判然としない場合がある点、非常に多義的なソーシャルキャピタル概念について先行研究のレビューが必ずしも体系的になされていない点、鍵概念であるソーシャルキャピタルと、いくつかの類似概念、たとえば、(社会的)ネットワーク、コミュニティとの異同について曖昧性が残存している点、インドネシアの被災地調査で用いたアンケート調査項目の一部について、先行研究における調査項目との対応が明確でない場合があるために調査結果の比較対照が困難である点、以上の諸点である。

しかし、以上の諸課題は、むしろ、本論文がもたらした貢献に比して重大なものではなく、むしろ、本研究領域における今後の課題を先取りして提示したものと認められる。

平成22年2月17日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。